

多文化主義オーストラリアにおける都市先住民の アイデンティティに関する人類学的研究

栗田 梨津子

広島大学大学院総合科学研究科

Anthropological Studies on the Identity of Urban Indigenous People in Multicultural Australia

Ritsuko KURITA

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

本論文は、今日の多文化主義の時代に生きるオーストラリアの都市先住民のアイデンティティに関する人類学的考察である。具体的には、差異の政治におけるアイデンティティの交渉の様態を実証的に検討する作業を通じて、多文化主義によるアイデンティティ支配に対する都市先住民なりの抵抗のあり方を詳述し、その諸相に考察を加える。本論文の主なデータは、2007年から2010年にかけてオーストラリア、アデレードで断続的に実施した計20ヶ月の現地調査に基づいている。

本論文の理論的立場と方法論は次の通りである。

ポストモダン人類学による文化本質主義批判の文脈において、民族的アイデンティティのような、個を否応なく全体に結び付け、均質的な単位に分節しようとする近代の支配テクノロジーに対する批判が行われ、近代支配からの脱却の可能性として、主に非西洋社会の人々による日常生活の場における雑種性や断片性に基づく些細な抵抗実践が着目されてきた。しかし、このような抵抗実践の概念の下では、自由、平等、民主主義等の西洋の普遍的価値観が深く浸透した入植社会国家に包摂された少数者による近代の支配装置への対応のあ

り方を十分に捉えきれないばかりか、抑圧者と被抑圧者の間にある不均衡な力関係の問題が軽視されてしまう怖れがあった。

上記の認識に従い、本論文では、多文化主義を、多様な人間集団を固定的な単位として分節していく、近代の新たな支配装置として捉え、実際に多文化主義が被抑圧者に「文化」や「アイデンティティ」をもつことを当然視させ、人々を動員させるに至る支配のメカニズムに迫る。さらにアイデンティティをめぐる、S. ホールが西洋先進国の少数者による新たな「文化の政治学」の形態として提唱した、従来の本質主義に基づく「アイデンティティの政治Ⅰ」と、反本質主義（構築主義）による「アイデンティティの政治Ⅱ」を分析枠組みとして参照し、都市先住民による集団レベルでのアイデンティティと、個人レベルでのアイデンティティ間の諸相の考察に接合する。

本論文の構成は以下の通りである。

第1章で、本論文の射程について述べた後、既存の人類学におけるエスニシティ論、及びポストコロニアル理論における文化的アイデンティティをめぐる議論の限界について指摘した。また、カルチュラル・スタディーズにおける「文化の政治

学」に関する主な分析概念について説明を行い、本論文で扱う事象との関わりについて論じた。さらに、オーストラリア人類学における都市先住民に関する先行研究の批判的評価を基に、問題の所在を確認した上で、本論文の目的、及び学術的意義について明示した。

第2章では、南オーストラリア州における対アボリジニ政策の歴史の変遷について論じた。アボリジニの白人との接触以前から、隔離・保護政策時代、同化政策時代、自主決定政策時代を経て今日の多文化・和解政策時代に至るまでの歴史を概観する中で、時代ごとの政策がアボリジニのアイデンティティに与えた影響についての考察を試みた。各時代の政策や法におけるアボリジニの定義は、地域やその時々々の社会状況に応じて変化する、一貫性を欠いたものであり、そのことが特に「混血」のアボリジニのアイデンティティに混乱をもたらす一因となってきたことを示した。また、1970年代以降、同化政策から自主決定政策への先住民政策の大転換に伴い、アボリジニであるか否かは自己申告制になったものの、今度は文化的差異の管理という形で、人々は依然としてアボリジニとは何かをめぐる政府からの規定に晒され続けていることを明らかにした。

第3章では、現在のアデレードにおけるアボリジニの社会状況について、政府統計及びその他の統計的研究を基に、人口と居住地域、出身集団、社会経済的状况、家族形態を中心に論じた。現在のオーストラリア社会において、多くのアボリジニは依然として低所得者層に属するが、一方で、1980年代後半以降、政府がアボリジニを教育機関や政府組織等における専門職として積極的に雇用するようになったことに伴い、アボリジニ内部で社会経済的格差が拡大しつつあることを示した。さらに、家族形態に関しては、核家族化や非アボリジニとのインターマリッジがより一層進み、生活様式における非アボリジニとの境界が以前にも増して曖昧化している点を指摘した。

第4章では、1970年代以来、新たにアボリジニであると自己規定する人々が増加し、彼らとそれまでアボリジニとして生きてきた人々との境界が曖昧化する中で、アボリジニ・コミュニティに

おいて「本物の」アボリジニとは誰かをめぐる問題が生じている点に着目した。まず、現在のアデレードのアボリジニの社会関係について記述した後で、政府組織及びアボリジニ組織におけるアボリジニとしての基準を明示した。併せて、組織レベルでの基準が、個人レベルでのアボリジニとしての自己認識に与える影響について、「盗まれた世代」の人々の人生経験を基に考察した。その結果、コミュニティの一員として認められるには、同じ出身地域集団の親族ネットワークによる同定ができることや、コミュニティの人々との間で社会活動の経験を共有していることが重視されているという点を明らかにした。但し、こうした基準は、一部の「盗まれた世代」の人々によるアボリジニとしての自己認識との間にズレをもたらしている点も指摘した。

第5章では、オーストラリア社会一般のアボリジニへの眼差しを視野に入れ、主流社会において要請されるアボリジニ像へのアボリジニ自身の対応を、主に教育機関における文化学習に焦点を当てて分析した。現在の主流社会の白人が抱くアボリジニ観では、純粋さや神秘性と結び付けられた肯定的なイメージと、野蛮性や暴力性に基づく従来の否定的なイメージとが混在している。そのような社会状況を背景に、都市のアボリジニが、多文化的状況下での非アボリジニとの相互作用において、混在するイメージによる差別や偏見に晒される中で、「アボリジニとは何か」について意識せざるを得ない状況にあることを確認した。その具体的事例として、アボリジナリティの再構築の試みである、公立の教育機関におけるアボリジニ文化学習の事例を取り上げ、その特徴、及び意義、文化学習への一般のアボリジニの対応について検討した。その結果、教授されるアボリジニ文化とは、アボリジニ自身によって再構築されたものであったが、政府や主流社会において創出されたアボリジニ文化に関するイメージや言説の影響を強く受けたものであることが明らかになった。そしてその教授内容は、一般のアボリジニの強いアイデンティティの基盤にはなり得ていないにもかかわらず、活動家や知識人のアボリジニによって先住民としての差異の交渉の道具として用いられる

と同時に、象徴暴力の下で「正統な」文化としてのお墨付きを与えられ、アボリジニにとって普遍的なものとして自然化され、再生産されていると論じた。

第6章では、アデレード郊外に暮らすあるアボリジニ家族の日常実践に目を転じ、第5章で取り上げた公立の教育機関での文化学習を通して教授される「文化」および「アイデンティティ」には回収されない、個人レベルでのアイデンティティの交渉の諸相の描写を試みた。その結果、貧困や差別により主流社会から構造的に排除される中で実践される、「ヌンガ・ウェイ」と呼ばれるアボリジニ独自の行動様式には、家族メンバー間での金銭の貸借をはじめとする相互扶助の実践が含まれていることが明らかになった。そのような実践は、彼らの都市での生存戦略としての側面をもつ一方で、現実の都市生活において浸透した消費主義や個人主義との間に軋轢をもたらし、必ずしも無制限に行われるものではなかったのである。さらに、同家族の白人との関わりに着目する中で、彼らは同じ低所得者層地域の出身である白人との間に、貧困という共通の経験を基盤とした交友関係を築いていることを示した。特に、土地権請求運動においては、同胞者からの支援が得られにくい状況で、彼らは、積極的に非アボリジニを巻き込み、環境保全や民主主義等の西洋の普遍的価値観の下で彼らとの連帯を図っていたことが明らかになった。総じて、様々な矛盾を含みながらも日々実践される「ヌンガ・ウェイ」は、このように曖昧化しやすい非アボリジニとの間の境界

線を引き直すための意識的な行為であることを示した。

第7章では、全体の議論を整理し、以下のような結論を導いた。

第一に、多文化主義の下での支配のメカニズムとその展開に関して、次のように指摘した。まず政府によって「正統な」先住民文化が選ばとられ、先住民はそのカテゴリーの中に封じ込められる。次いで、先住民文化の啓蒙という名目で、主流社会の人々に本質化された文化が教授され、先住民文化についてのステレオタイプが強化される。その結果、先住民の側は、主流社会の人々から「アボリジニ」としての承認を得るために、そのようなカテゴリーに依拠せざるを得なくなり、そのカテゴリーが益々固定化されるのである。第二に、このような支配のメカニズムに対し、アボリジニの側は、先住民としての差異を交渉する場で、均質的で首尾一貫した集団的アイデンティティを主張する（「アイデンティティの政治Ⅰ」）一方で、日常生活の中では状況や目的に応じて、非アボリジニを包摂・排除することにより、彼らとの境界を柔軟に操作している（「アイデンティティの政治Ⅱ」）のである。アイデンティティの政治ⅠとⅡの緊張関係を生きること、完結することのない位置取りを通じた交渉こそが、都市先住民特有の抵抗の諸相として現象化しており、まさにそのような動態にこそ、西洋近代の支配装置としての「アイデンティティ」から脱するための可能性を見出すことができると主張した。